低学年における音あそびの指導

── 第１学年「すてきな音」 ──

真　田　美智子

１．低学年の児童と音あそび

児童一人一人が意欲的に音楽に関わり，自分なりの音楽を表現しようとする態度や能力を育てるにはどのような学習を積み重ねていけばよいのだろうか。

今回の指導要領の改訂において，各学年の表現領域に「音楽をつくって表現できるようにする。」という項目が記されている。既成の楽曲を表現するだけでなく，一人一人が創意工夫をこらして自分で音楽を作り出そうとすることの重要性がうかがえる。音楽をつくる過程の中で表現意欲や基礎的能力を高め，音や音楽に対する直感力を育てることをねらいとしている。

学年	音楽をつくって表現できるようにする	
低	ア簡単なリズムや旋律をつくって表現すること。	イ即興的に音を探して表現すること。
中	ア旋律や音の組み合せを工夫して表現すること。	イ即興的に音を選んで表現すること。
高	ア音の重なりや曲の構成を工夫して表現すること。	イ自由な発想で即興的に表現すること。

これから述べる「音あそび」は低学年の「イ即興的に音を探して表現すること。」に関わる事例である。

低学年の児童は，音楽活動に関しては一般的に次のように言われている。

・自己表現の意欲が強い。
・他の人の声や音を注意深く聴かないで表現しがちである。
・体を動かすことを好む。
・リズム感覚が発達する時期である。

児童一人一人の表現意欲を大切にしながら，教材及び指導の工夫を通して，それぞれの児童の音楽に対する興味や関心を育て，持続させるように指導することが大切である。また，その過程の中で児童一人一人に基礎的基本的な内容が身につく学習でなければならない。

どのような「音あそび」の場を構成すればよいのか，実践を通して考察したい。以下の３点が実践の視点である。

（１）「音あそび」の活動を通して，自分の音をつくりだすことへの興味関心を育てることができるか。
（２）「音あそび」の活動を通して，幅広い音楽性を培っていくことができるか。
（３）「音あそび」の活動の中で，児童個々の特性を大切にしていくことができるか。

実践事例「すてきな音」は，第一次「タンブリンを鳴らそう」，第二次「身の回りの物を鳴らそう」，第三次「きらきらぼしのお話をきこう」から構成されている。ここでは，第二次の実践について詳しく述べてみたい。

2．指導内容（「すてきな音」第１学年２学期）

(1) 題材について

耳をすませてみれば，身の回りにはさまざまな音が聴こえてくる。また，１本の棒からでも打ち方によっていろいろな音を出すことができる。本題材では，身の回りのいろいろな音の響きに注目し，音の出し方を工夫することによって，音のおもしろさを味わわせることをねらいとしている。また，音の出し方も，「こう持ってこう打ちなさい。」ということよりも，「ここをこう打ったらこんな音が出た。」というように，児童自らが体験し，発見し工夫する態度を大切にして指導したい。

児童はこれまで，「がっきあそび」などで歌に合わせてカスタネットや鈴，タンブリンなどでリズム打ちをする活動を行っている。リズムが合いにくいこともあるが，大変意欲的に取り組んでいた。本題材では，さらにタンブリンや身の回りにあるさまざまなものから音の出し方を工夫して表現させていく。そのためにも個々の児童が自分なりに工夫した音が学級のみんなの中で表現でき，互いに聴き合える場を設定する必要がある。

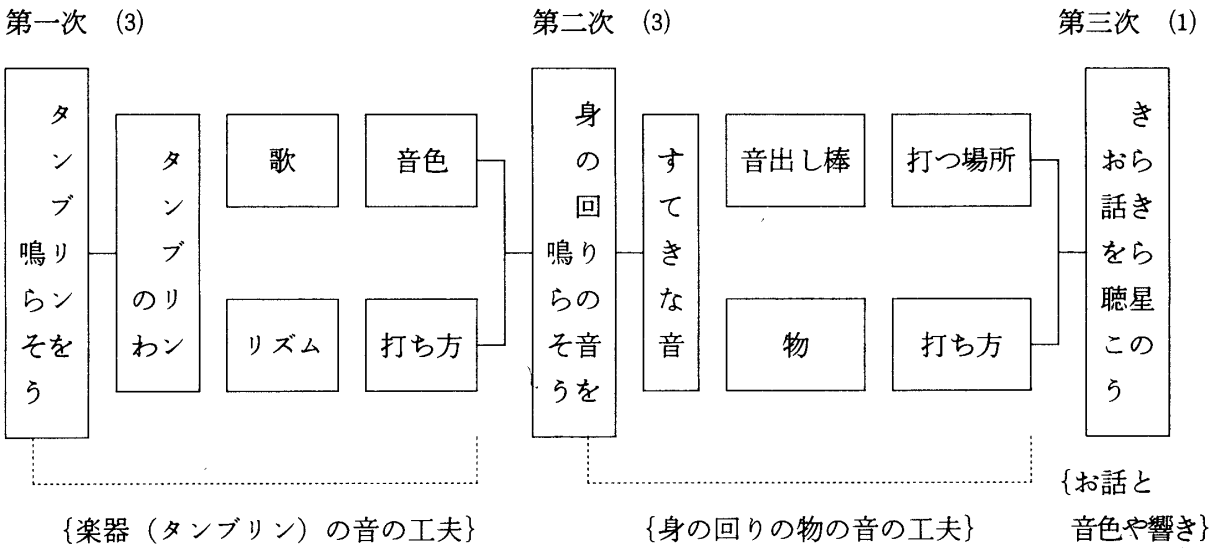
教材曲としては，「タンブリンのわ」（山上武夫作詞，岩河三郎作曲），「すてきな音」（飯沼信義作詞作曲），「きらきらぼしのおはなし」（川崎祥悦作曲）を扱う。

(2) 指導目標

1，身の回りのいろいろな音色や響きの違いに関心をもたせる。

2，楽器（物）の打つ場所や打ち方を工夫して音を出させる。

(3) 指導内容と計画……7時間



(4) 授業設計の焦点

実践の視点をふまえ，第二次においては次のような教材の工夫及び場の設定を行う。指導過程における児童一人一人の表現及び指導後の感想をもとに考えていきたい。

①一人一人が意欲的に「音あそび」に取り組める教材の工夫

音を出すためには，打つ，振る，こする等，さまざまな方法が考えられる。さらに，素材や奏法の工夫によっていろいろな音色が生まれる。本題材では，児童の発達段階及び小学校における「音づくり」の導入期であることを考慮し，最初は「打つ」方法を中心とする。また，打つ道具を共通のものとすることで「音あそび」の主体的な活動のきっかけとしたい。打つ道具は，手に入りやすさ，音の響きから，竹のわりばしにすることにした。

児童共通の「音出し棒」から，個々の児童の意欲的な活動が生まれるか，授業を通して明らかに

していきたい。

②個々の表現を高める「聴き合う場」の設定

－音を出して楽しむ段階から，よりよい表現を味わう段階へ－

１年生の児童は，活動そのものを楽しみ，自己表現の意欲が旺盛である。楽しむことを大事にしながら，個々の表現力を高め，音楽を味わう態度を育てたい。本題材では，学習活動に互いの「音」を出し合い聴き合う場を取り入れることにより，個々の音の発見を広げたい。

３．「音あそび」の授業の実際

(1)　「音出し棒」と児童－わりばしから「音出し棒」へ－

「これはいろいろな音を出すことができる音出し棒です。」

このように第１時に１本の「音出し棒」を提示した。竹のわりばしに色を塗った物である。児童は不思議そうな様子であった。次にお菓子の空かんを取り出して，「すてきな音」の歌を歌いながら音を鳴らした。

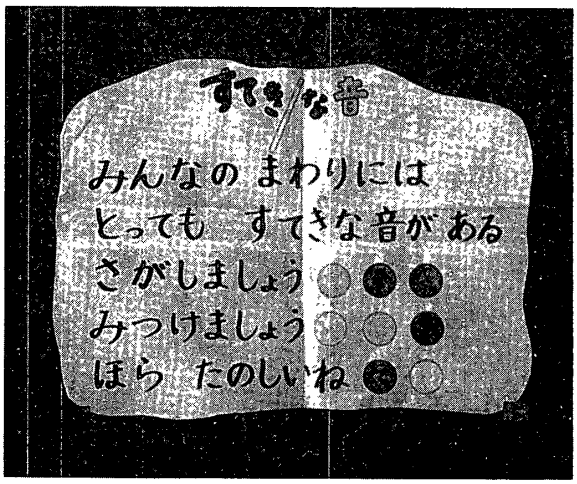
「棒だけじゃなく，かんもいるじゃないの。」

「かんじゃなくても音が出せるよ。」

「わたしもやってみたい。」

やってみたいという児童に音出し棒を渡し，歌いながら順番に鳴らさせる。

「こうしたら音が違うよ。」と，かんの中や外を打つ児童。打つ強さによっても音の大きさが変わる。



歌とリズムが次第に定着してきたところで，「ここに，音出し棒のもとがあります。一人ずつ渡しますよ。」と言ってわりばしを渡した。「実は先生の音出し棒はこれに色を塗って作りました。」

「やっぱりわりばしだと思った。」「色をぬって作ろう。」と言いながら，さっそく机の上や中の物を打って音を鳴らし始めた。

わりばしを「音出し棒」に変身させること，「音出し棒」で音を鳴らすことへの意欲を持たせること，活動の方法を知らせることがここでのねらいであった。

(2)　第二次第２時の指導の実際

①目　標　「すてきな音」の歌に合わせて，身の回りの物から音をみつけて鳴らさせる。

②準　備　　歌詞，音出し棒（教師用）

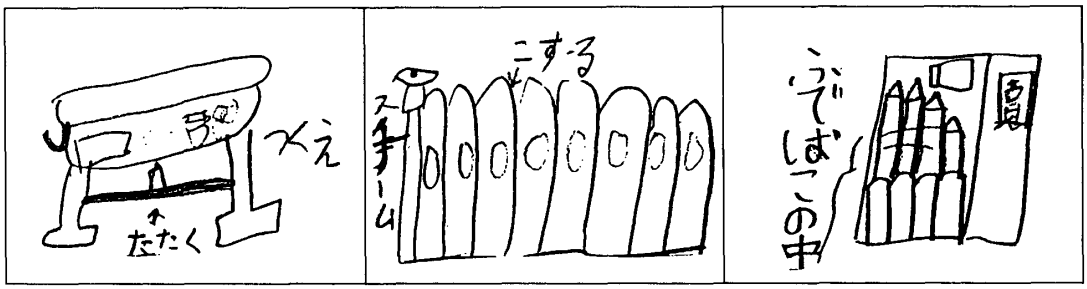
③評価の観点

音楽への関心・意欲・態度	身の回りの音を鳴らす表現活動に意欲的に取り組む。
音楽的な感受や表現の工夫	音出し棒で音をみつけ，選んで鳴らすことができる。
表　現　の　技　能	自分の音を，曲に合わせて鳴らすことができる。
鑑　賞　の　能　力	表現された音を，音色に気を付けて聴くことができる。

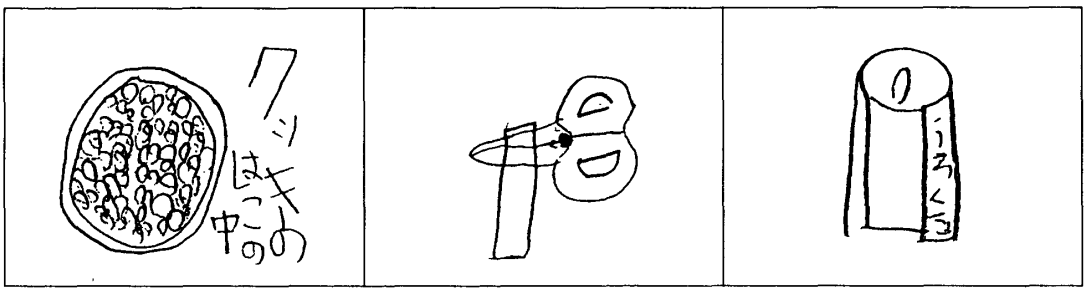
④指導の流れ

学習過程	児童のようす
1 リクエスト曲を歌う。	1．音楽学習のはじめに位置づけている。「みんなのうた」の曲集から児童のリクエスト曲を歌った。
2 「音だしぼう」で身の回りの物から音をみつけて鳴らす。 ・音をみつけよう。 ・どんな音がするかな。	2．前時に，「音だしぼうでいろいろなものを鳴らして音をみつけましょう。」と呼びかけている。 すでに，「先生，いい音をみつけたよ。」と言っている児童もいた。また，家から空かんや入れ物等を持ってきている児童もいた。 机のまわりやいす，教室のすみのスチーム等，いろいろなもので試していた。
3 「すてきな音」の歌に合わせてみつけた音を鳴らす。 ・みんなで鳴らそう。 ・○○さんの音を聴こう。 ・○○くんの音はどんな音かな。 ・こんな鳴らし方があるよ。 ・まねをして鳴らしてみよう。	3．活動が単調にならないように，次のような活動を組み合わせることにした。 ①みんなで音を鳴らす。 ②一人の児童の音を聴き合う。 ③模倣できる音をみんなで鳴らす。 ②の活動は，みんなの前で表現したい児童にさせる。 歌に合わせて，それぞれの児童が見つけて選んだ音を表現した。 机，いす，筆箱，鉛筆，本等いろいろなものを使って鳴らしていた。 はじめは，同じ所（机の上ならそこだけ）を打って鳴らす児童が多かった。しかし，互いに聴き合ううちに，同じ机でも打つ場所を変え，音を変化させて表現する児童がみられてきた。 また，打つだけでなく，したじき等の間に音出し棒をはさんでこすって音を出す方法をみつけた児童もいた。

(3) 児童の音みつけ



①（机のかねの所）　②（スチーム）　③（筆箱の中の鉛筆）



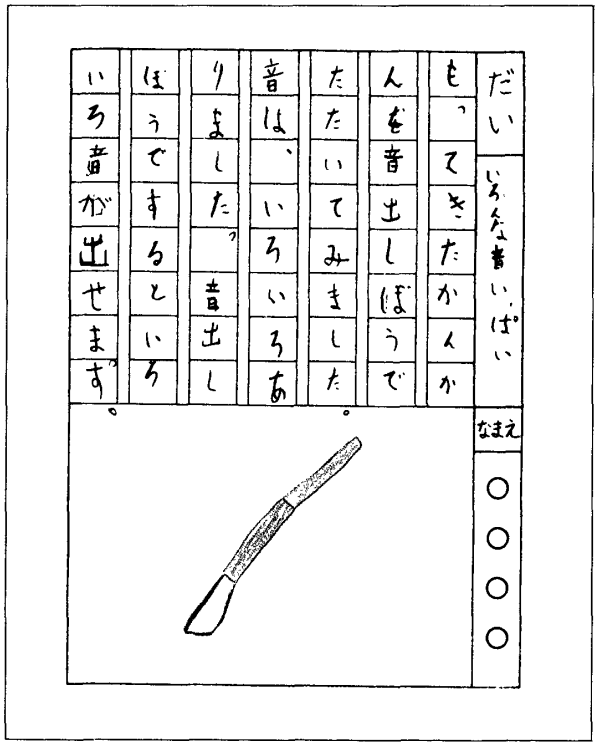
④（クッキーの空缶）　⑤（はさみ）　⑥（ジュースの空缶）

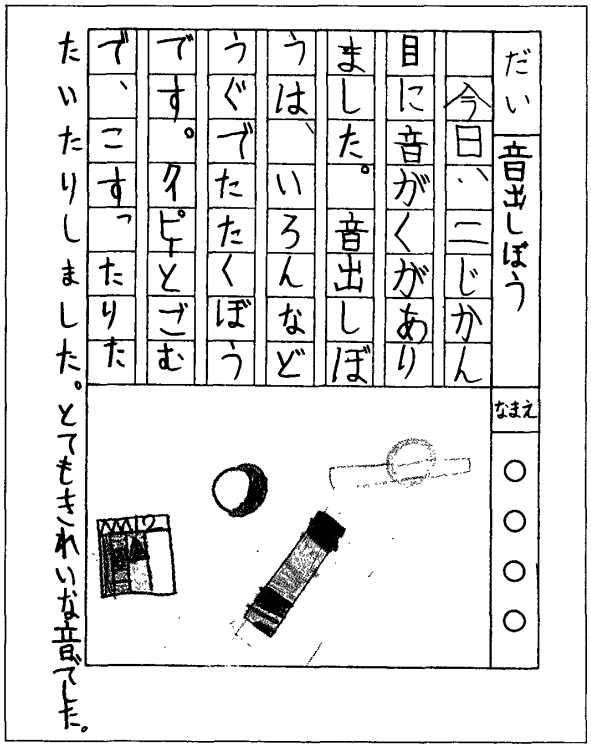
これらの中で打って音を出しているのは①④⑤である。②③は，ギロのようにこすって音を出す方法を工夫している。⑥は空き缶の穴の中に音出し棒を入れて，トレモロ奏のようにして音を出している。この他に，筆箱のかねの所やものさし，したじき，お菓子の空き箱（紙）等がみられた。

音の鳴らし方は，打つ，こする，トレモロ奏の3種類が工夫された。

(4) 児童の感想

第二次第3時に，音出し棒を使った活動を振り返って書いたもの





4．実践の結果と今後の課題

(1)「音あそび」の活動を通して，自分の音をつくりだすことへの興味関心を育てることができるか。

本実践では一人一人が意欲的に「音あそび」に取り組める教材の工夫を考えた。即ち，意欲的に音探しができるように，音を出す道具として「音出し棒」を提示した。第2時には「先生，いい音みつけたよ。」といって机のかねの棒の所を「カンカン」と響かせている児童がいた。また，音出し棒に対しても家で好きな色を塗ってくるなど興味は持てたようである。「音出し棒」は音あそびへのきっかけを作ることができた。

(2)「音あそび」の活動を通して，幅広い音楽性を培っていくことができるか。

児童の感想より

○ぼくは，どんなところでも音が出ると知ってびっくりしました。クーピーやつくえなどでぼくはしました。

○音はいろいろありました。みんないっしょうけんめいだしていました。音はおもしろかったです。

ふだん出しているような音でも音楽にして楽しめることを感じているようである。

また，本実践では幅広い音楽性を培うために，個々の表現を高める「聴き合う場」を設定した。第二次「身の回りのものの音の工夫」では3時間とも活動の中に「互いの表現を聴き合う場」を設定した。互いの音を聴き合う過程で，同じ机を打つ場合でも打つ場所を変えて音を工夫する児童がみられた。しかし，他の児童の表現が続きすぎると聴くことに集中できなくなる。他の児童の表現を長時間聴き続けることは困難だが，活動の中に「聴く」ことを取り入れることは個々の表現をよりよいものにするために必要だと思われる。1年生の発達段階に合った多様な活動はいかにあるべきか，今後の課題と言える。

(3)「音あそび」の活動の中で，児童個々の特性を大切にしていくことができるか。

1年生のこれまでの音楽経験はさまざまである。リズムにのりやすい児童，反対にのりにくい児童もいる。その意味では個人差は大きい。それのみに目をやるとどうしても「できるできない」で児童を評価しがちである。「すてきな音」での「音探し」「音の工夫」の場では，児童の活動の過程を見ることが大事になる。児童個々の特性を大切にしていくことができるかどうかは，児童の音楽活動の過程をどの様に評価して指導するかによるものと考えられる。